



第二十二卷 第三號

(通卷第八十七號) 昭和十二年七月發行

研 究

神道の基本的性格

柴 田 實

一

神道とは何か、といふ問に對しては、その歴史のすべてを擧げてこれに答ふるの外はないであらうが、その歴史に就て見る時われ／＼はそこに明かに二つの方面の存することに氣付く。即ち一つは國初の昔より傳はるとされてゐるところの神祇の祭祀崇敬、並にそれに關聯しそれらを維持して行くところの諸々の行爲慣習或は制度施設の如きもの、即ちいはゞ行爲或は事實としての神道であり、今一

神道の基本的性格

第二十二卷 第三號 四三七

つはそれらの神祇の祭祀その他に就ての種々の口碑所傳或は意見論說等より、更にそれに基くところの様々の行儀規範の如きものまでをも含めて、いはゞロゴス即ち言葉としての神道である。今日日常の用語として神道といふ言葉の語られるとき人は往々稍狭く主としてこの後の一面、即ちわが國の神の崇敬を中心とする特別の教説のみに限つて了解してゐるやうであるが、併しかゝる教説と雖も決してたゞ單にそれのみに於てあるのではなく、必ずその立つところの地盤として、またその教説の志向する理想として何等かの行爲或は事實を有するものであり、また逆にそれに就て特に言ふべき何等の所傳教説もないところの祭祀行事の如きものにあつても、必ずそれ自らの中にそれを支へるところのロゴスを含んでゐるものと考へられる。

總じてわが國の道といふ言葉が常にかゝる二重の意味を擔つてゐることは、かの歌道といひ劍道といひその他すべて道と名のつくところのものに於て廣く認められるところであつて、最近西田博士が日本武士道に就ての小論^{岩波講座東洋思潮の中}に於て極めて明快に説示されたところである。即ち博士は右の論文に於て日本の武士道なるものは、武士階級が常にその時代より一つ過去の時代の事實、即ち歴史的事實の上に自己自身を認證し、その體驗を通して先人の前言往行を當來の時代に對する一の規範にまで昂めたものである、従つてそれは何よりも歴史的なるものであり、その全き姿はそれ故に武士が武士たることを止揚したところの明治時代になつて始めて最も明確にされたものなることを説かれた。われ

われはこれと同じ比論を神道に就ても試みうると思ふ。即ち神道といふものも亦過去よりの傳統であるところの神祇の祭祀崇敬をもととしてその上に一つの共同社會が社會としての共同の意欲を意識しその社會の統一と相續發展の爲の規範を立てんとしたものであり、且それは古代の氏族制度社會から中世の村落共同態の如きものを經て近代國民國家の成立するに至つてその意義を一層大きくするに至つたものである。従つて神道なるものはたゞ過去に於けるわが國民の信仰であり、道德であり、宗教であつたといふだけのものではなくして、現在なほ生けるもの、發展しつゝあるものであり、將來に互つて常にその意味を改め行くものであること、われ／＼はまづ研究に先立つて思はねばならない。換言すればわれ／＼の神道研究の態度は何よりもまづ歴史的でなければならぬ。

然るに、これに關聯して特に注意せらるゝことは今日一般に神道を論ずる人々が往々にして中世の神道を全くその視野の外においてゐるかの如くに思はるゝ點である。これ今日の神道家なるものが直接その系統を近世に於ける復古國學者に引いてゐるからであつて、かの本居平田等の神道が中世神道の否定の上に成立つてゐるものなることは言あらためて説くを要しないことであらう。然るに私は今寧ろ主としてこの中世神道を主眼に神道一般の基本的性格を考へてみようと思ふ。蓋し中世にあつては、所謂事實としての神道と言葉としての神道とが最も密爾の關係にあり、その相關的全體の理解の爲に極めて便なるものがあると思惟されるからである。併しながらそれには必然に國學者の立場を越

えた一層高次の立場を必要とするであらう。そは外ならぬ、彼等によつて却けられた儒佛を、その神道の形成發展に於ける意義を、正しく理解することであり、また今日の神道家に於て往々忘れられてゐるロゴスの地盤としての事實、即社會との關聯を確に把握することではなければならぬ。

まづ順序として古代に於ける神道の性格に就て考へてみたいと思ふ。

二

古代に於ける神道、所謂古神道或は原始神道なるものを考へる時、人は直ちにわが國固有の信仰を説かうとする。即ち古代に於ては所謂惟神の道が神ながらも行はれたと考へんとするものであつて、これまた近世復古國學者達が中世神道に於ける種々の假托や強辯を捨て、記紀萬葉等の上に古代の精神を見ようとしたとき始めて下された解釋であつた。併しながらわが國固有とは果して何かとの吟味は姑くおいて、抑々何が惟神の道であつたかと問ふならば、そは畢竟古代人が自らの行爲し實踐するところを以て即神ながらなりと信じ、惟神なりと思惟したとする外はないのであつて、そこに既にわれ／＼はロゴスとしての神道の存することを認めなければならぬのである。従つて私は今直ちに惟神の道を言ふことをおいて、まづ行爲或は實踐としてあつたところの神道を考へてみたいと思ふ。その場合われ／＼は普通の歴史家に於ける方法、即ち記紀萬葉等の古典のみを資料とする文獻學的方法にのみとゞまることが出來ず、廣くわれ／＼が現在體驗するところの事實、就中民俗學的な資料を基礎と

するところの考察を必要とする。この方法論上の問題に就てはこゝに詳論することは出来ないけれども、この立場の正當なることは所謂文獻學的方法と雖も實はその根柢に現在に於ける體驗を豫想するものであることを思ふならば多く辯ずることを要しないであらう。

然らばわれ／＼は何を以て行爲としての神道の中核と認むべきであらうか。私はそれは祭祀といふことの外にないと思ふ。然らば祭祀とは何であらうか。

「祭祀卽「まつり」といふ言葉は「まつろふ」といふ言葉を間に置いて服従或は奉仕の義をその根幹とするものであると、古典學者は説いてゐる。この解釋は恐らく多くのをはづれたものではないであらう。併しながらわれ／＼はかゝる語義の鑿索よりもつと端的に具體的な祭そのものを見ることによつてその意味を知らなければならぬ。今日われ／＼に遺された古代の祭祀に關する文獻は、例へば神祇令にせよ、延暦儀式帳にせよ、また延喜式にせよ、いづれもその性質よりして公に制度として定められた祭祀の次第を記すにとゞまつて祭祀そのものゝ意味に就ては何等述ぶるところがないが、これは寧ろそれが時代の人々にとつて自明的なことであつたからでもあらう。われ／＼は却つて神代の物語として傳へられる天岩戸の前に於ける儀式の如きに於て一層正しく古代に於ける祭の姿と、その意味とを讀みとることが出来るのである。卽ち祭にはもとより恒例臨時の別があり、またその趣旨とするところに従つて大小の差も附せられるであらうが、それは要するに神と人との相嘗あひなを通じて實現され

る神人の合一和樂をその本質とするものであつたと考へられる。祭に先んじて行はれる諸々の潔齋精進は即ちこの合一の爲の必要なる條件であり、祭時に於ける音楽舞踊（即ち國語の本來の意味に於けるあそび）はとりもなほさず神人和樂の表現であつた。

而してかゝる神人合一に於て人とは勿論單なる個人若しくは少數の司祭者ではなくして一の共同態、具體的にいへば一の氏族なり、郷村なりの全體であつた。そのことは嚮に擧げたところの天岩戸の前の儀に於て八百萬の神々が神集ひにつどうたとされるに於ても、また神武天皇が鳥見の靈時に於て天神地祇を祭られたとき八十伴緒を率ゐてとあるによつてもいひうるであらう。これ祭祀が單なる個人の禮拜や祈願と異るところであり、縦ひ祭の儀式を執行ふものは神聖なる司祭者としての氏上や或は神人の如きものであるにしても、祭祀の眞の主體となるものは一つの氏族なり郷村なりの全成員と考へねばならない。而してかゝる氏人や郷民等は祭に於ける神との合一を契機としてまた自ら相互に氏族或は郷村としての統一を意識したのであつて、祭祀が年々季節を定めて繰返へされることは、即ち共同態が常にその統一を新にする所以であつた。かくて祭にはその主體として共同態があるのみでなくその志向の中にまた共同態を豫想するものであつたといへよう。

翻つて神に就て見るならば、それは上に説くところより必然に考へられるが如く、その共同態（氏族なり郷村なり）の精神的中心たるものであつて、それが實體的に如何なるものであるかは多く問ふ

ところではなかつた。即ちそれは氏族や郷村の共同的生活の中に生きてゐるものであり、祭祀に於て自らを顯はすものであつた。言換へればそれは人間とは別個にそれ自體として存在するものではなく人間に於てあり、人間に對して現はれるものであつた。わが國の神とは何かといふ問題に對して、或はカミなる語義より説明しようとし、或は神と呼ばれる諸々對象からその性質を歸納して例へば靈異あるものとか畏かしこきものとか抽象しようとする、多くの人々によつて今なほ繰返へされてゐるところの論議はいづれも神といふものを人間より切離してそれ自體としてその性質を考へようとする點に於てその方法を誤つてゐる。われ／＼は寧ろたゞ神とは祀らるゝものと言ふを至當なりと思ふのである。即ち今少しく嚴密に言はゞ神とは祀らるゝに於て現はるゝもの、或は現はるゝに於て祀らるゝものとする事が出來よう。

かやうにいふとき、人はそはたゞ神に就ての形式的な一面を言ひ現はすにとゞまつて、それ／＼の神がその祀るところのものに對して或は祖神であり、或は守護神であるところの内容を見落してゐることを咎めるかも知れぬ。併しながらわれ／＼は古代に於て祀られたところの神々が果していふところの如くそれ／＼の氏族の祖神であり、又その崇拜する守護神であつたか、否か、その點は姑く問はず、明に祖神と認むべきものにあつては、それがたゞ人より祀らるゝ點に於てのみ神であり、その他の點に於ては全く人に異ならないことを見るべきであつて、それをも神と考へるならば神自らがまた

神を祀るといふ二重の關係を見ることゝなるのである。最も明瞭な例をとるならば、天照大神はいふまでもなく皇室の祖神であり、古くより尊も重く崇められた神であつたが、神代史の語るところによれば大神御親ら神を祀る爲に齋服屋に於て神衣を織らせ給うたといふのであつて、われ／＼はそこに大神が自ら司祭者であらせられたことを認めなければならない。このことは夙く故高木敏雄氏によつて注意せられたところであり、最近また和辻哲郎博士がそこに着目して上代に於ける神の意義の特殊性に就ての示唆深き所見を述べられたところである。即ち博士は「思想」昭和十一年六月、日本文化特輯號に載せられた右の論文に於てわが上代に於いて祀らるゝところの神は常に何等限定せらるゝことなき神祕力としてその實體の極めて明ならぬものであるが、その神の意志を述べ傳へるところの神聖なる司祭者は唯一人に集中してゐる、それが即ち天皇であり、天皇は神意の宣布者として親らも亦神と崇められた、而してこの天皇を通して現はれるところの神意なるものは畢竟國民の全體意志を反映するものに外ならなかつたであらうと述べられてゐる。即ちその意は古代に於ける神は單に信仰の、まして知識の、對象としてあるものではなくして、社會生活の中に生けるものとして、即ちいはゞ主體としてあつたことをいふのである。

かく神が實質的に明確なる限定を有たないことは逆にそれが如何なる形をもとりうることであつた。言換へれば神は歴史と共にその形を新しくしうることであつた。即ち、わが國の神は世界の創造

者として劫初より絶對不變にそれ自らとしてあるものでもなく、また人類の救濟者として此の世より隔絶せる十萬億土の彼岸にあるといふが如きものでもなく、正しくわれゝの歴史の中に自らを現はすものであつた。

然らばかくの如き神は意識の上に於て如何に把握されたであらうか。

三

神道なる文字は何人も知る如く用明天皇紀に「天皇信佛法、尊神道」とあるを以て初見とし、尋でまた孝徳天皇紀に「尊佛法、輕神道」とあるに見る如く常に佛法と相對して用ひらるゝ所である。これ従前何等名づくべき要のなかつたものが、新に外より異質的なものゝ入來るに至つて、始めて自らの行ふところを明確に意識せることを示すものなること言ふまでもないが、古代人が自分の踏むところの道を神ながらなりと信せんとしたことは決してこの時に始まるものではないであらう。蓋し古代の氏族制度社會なるものは上に述ぶる如く神を中心とする一の祭祀共同態であり、そこに於ては氏族の全體意志は常に神の意志として受入れられたからである。然も所謂惟神の道とは單にかく全體意志を神意に歸せんとするものたるにとゞまらず進んでその神を以て自己の祖神と考へんとするものであつた。わが國の神道の特色が祖先崇拜にあるとする最も廣く行きわたつた見解は一にこの點にその根據をおくものであり、それはその限に於て敢て誤といふことは出來ないけれども、その意味は今少しく

嚴密に反省せられなければならない。所謂氏神なるものが、必ずしも一般に信せられてゐるが如く、各氏族の事實上の祖先を祀つたものと限らないこと既に多くの人の指摘するところであり、それは普通以後世に於て産土神と相混淆するに至つた結果なるかの如くにも説かれてゐるが、それとても必ずしも事實とは合致しない。われ／＼は氏神とはかの氏寺、氏院等の稱呼の如く、單に氏に於て祀らるゝところの神の意に解すべきであるとする岩波講座日本歴史、山本信哉神祇祭祀三七頁參照の寧ろ穩當なるを思ふのであるが、然も重要なのはかく氏神が事實その氏の祖先なりや否やの點ではなくして各氏族が己が祀るところの神を以て夫々自らの祖先なりと信じたことであつた。即ちかゝる祖神の觀念は要するに一の氏族に於て現在の事實としてその共同生活の中に生きてゐるところの神の力を、意識の上に於て過去の祖先に結びつけたものであつて、言換へれば各氏族がその統一と存在の根據を過去に於ける神々の意志、行爲に求めたことを意味する。かの神武天皇が大和平定の偉業を完成して將に橿原に宮を奠め給はんとする時、詔して「上則答乾靈アインカミ授國之徳、下則弘皇孫養正之心」と仰せられたとするは、書紀の記述の表に於てはいふまでもなく嚮に神代卷に皇祖の神勅があり、今天皇がこれに答へ給はんとする意を述べたものなること明かであるが、事實上よりするならば天皇が自らの偉業を神意に基くものと信じ、その達成によつて更に祖神の意志を認證し給うたものとせねばならない。

而してかくの如き關係の表明が即ちロゴスとしての神道であるとするならば、それは正しく歴史の

形をとるものであらう。われは記紀の編修に先立つて各氏々にそれ／＼その氏として神よりの傳承を物語る歴史を有つてゐたことを知つてゐる。かの齋部氏の古語拾遺の如きは偶々、その後に出で今日に傳へらるゝに至つた唯一のものであるが、この氏々に於ける神よりの傳承の物語こそ古代に於けるロゴスとしての神道であつた。それはかの祝詞の如く恐らくは氏々の祭ごとに氏人の前に宣説かれ、氏としての統一を強固ならしめる意味を有つてゐたのであらう。

神道が所謂教祖宗教と異り、何等人間の解脱救済を説くことなく、また特に個人の道徳行爲に就ても赤き心、清き心以外多く教へるところのないこと、屢々その特質の一と考へられるところであるが、神道の實踐的意味はかくの如き共同體の統一、その全體性の維持、發展を志向する點に求めらるべきであらう。

然るに今日われ／＼が見るところに於てはかくの如き家々の所傳は國家の歴史としての神代史の中に吸収同化されてゐる。このことはその基礎に各氏族の私の祭祀が國家の祭祀に統合せられるに至つた事實上の歴史を豫想せしめるものであるが、われ／＼はそこに古代の神道が一層明瞭に歴史としての性格をとるに至つたことを見るのである。わが神代史が如何にして成立したかの問題はもとより茲に簡單に説きつくさるべき限ではないが、少くともそれが嚮に祖神の觀念に就て述べたところと同じ論理を以て、現在の事實として存する國家の統一、氏族制度社會の存在の根據を過去の神々の中に求めんとする要請に出づるものであることは疑なきところであらう。それは單に天上に假想された神々の世界の物語ではなく、まして神の義と愛とを説く爲に設けられた方便の樂土の敘述ではなくして、

正しく一つの歴史であつたのである。その意味は神々の行歴がたゞ過去に於て現實にあつたことゝして述べられてゐることのみをいふのではなくして、實にその事實と現在即ち人の代との繋がり考へられてゐるをいふのである。而してこのつながりの意識の事實的基礎は直接には神々の祭祀に於て與へられるものなることまた説くを要しないであらう。

惟ふにその祀るところの神を以て己が祖先なりと考ふる祖先神の觀念は必ずしも獨り、わが國古代に於ける信仰の中にのみ存するにあらずして、廣く所謂農耕文化圏に屬する諸民族に就て見出しうるところ、更には一般にトテムイズムの社會にまでも推及して考へうべきところであるが、その祖先神の信仰がロゴスとして、わが神代史に見る如く一つの歴史にまで昂められたことは確にわが國のみに於て認めらるゝところ、われ／＼がそこに神道の基本的な性格を考へんとすることも十分許さるべきであらう。

四

上述するところによつて私は極めて概略ではあるが、ほぼ古代に於ける神道なるものゝ基本的な性格を明にしえたと思ふ、かくの如き性格はその後の歴史を一貫して今日に至るまで神道の基底に認められるのであつて、普通世人が近世國學者と共に、中世に於ては佛敎々理の附會や儒敎的解釋によつて古神道の相が歪曲せられ、或は隱蔽せられたかの如く考へてゐるのはなほ皮相の見をまぬがれぬもの

と思ふ。以下私はその點を明にしたいと思ふ。

中世神道の根幹をなすものは言ふまでもなく本地垂迹の教理であつた。然るに本地垂迹説なるものは、わが國の神は本來佛であり、衆生濟度の爲に和光同塵、權に此國土に化現せるものであるとする本來の説にせよ、また後にそれを翻してわが國の神こそ根本であり、佛はその垂迹であるとする論議にせよ、要するに神と佛との間に本迹或は權實の關係を説かんとするものであり、なほ約言すれば神と佛との本源的一致を言へるものであつて、神そのものゝ實質的性質即ち神の屬性に就ての立言ではなかつた。即ちそれはかの西洋の神學に於けるが如く神の義たゞしさの論議でもなく、また神の愛の説示でもなく、況んや神そのものゝ存在に就ての論證といふが如きものではなかつた。そのことは一つの神の本地を如何なる佛に擬定するかに就て確たる標準のなかつたことに就ても容易に考へえられるであらう。即ち元來わが國の神はその屬性に就て對象的に明確な意識を缺くものであつたこと前章にも述べたところであるが、なほ強ひて之を言へば火の神迦具土といひ、水の神水罔女といひ、また豊受大神宮を以て五穀の神とし、八幡宮を以て武神とするといふが如く、それ〳〵その主たる性質なり、職分なりに就て考へられるところはあり、殊に佛菩薩に至つては最も明確にそれ〳〵その本性並に形相に就ての規定があつたにかゝはらず、神と佛との本迹の關係の設定に當つてはかゝる性質相互の近似類同が多く顧慮せられたらしく考へられず多くは大日、釋迦、藥師、觀音、阿彌陀等最も普通に信仰

ある佛菩薩のみが之に當てられ、屢々同一の神が或る時は大日と考へられ或る時は觀音と考へられたこと既に清原博士が多くの類例に就て證示せられたところである。神道沿革史論二 一五―二三八頁 このことは要するに本地垂迹説によつてわが國の神が根本的には何等の變化を被らなかつたことを意味し、寧ろそこにわれ／＼は却つて佛菩薩がその本來の特性を忘却されて、ほとけなる點に一様化され、そのほとけはまた神であるといふやうに日本化して來てゐることを見るのである。

かやうに本地垂迹説なるものが本來神の性質に就て語るものでないとすれば、その中世神道に於ける意義は果していづこにあるとすべきであらうか、思ふにそれはその説が神の縁起を説くものなるところに求めらるべきであらう。神の縁起とは要するに一つの神社に就てその神が何時如何に化現し勸請され、また如何なる神徳をあらはし神威を示したかの物語であり、所謂本地佛との關係はその化現勸請に先立つて語られ、或はその神徳神威の根元として説かれてゐるのである。それは神の縁起とはいひながら、要は神と人との因縁、結合の關係の歴史である。縁起といふ言葉は本來隨縁起生の意であり、それは自然界に於ける單なる因果關係（今日自然科學に於て考へられるが如き）の系列とは異つた人間界に於て、今現にあるところのものに就て問ひ語られるところの過去の山來因縁である。即ちそれこそ上來説くところの意味に於て正しく一つの歴史であつた。われ／＼は、中世の縁起談がその神の鎮座に先立つて本地佛としての山來を説くところ、その性質に於てあたかも嚮にいふところの神代

史の性質と似るものあるを思ふのである。

中世文學として謠曲の詞章が同じくかくの如き構造を有つてゐることも併せて注意せらるべきことであらう。即ち謠曲の構成は一般に最初によつある事件があり、次にその困みによつて亡靈が現はれ、或は翁が出づる等のことあつてその口を通して昔の由來、因縁が語り明され、かゝる過去の歴史を知ることによつて最初の事件にある結末が與へられるといふ形を取つてゐる。

而して中世に於てはかくの如き歴史即ち縁起を説くことが直ちに神道であると考へられたことは、

當時行はれた八幡熊野以下諸々の縁起談を廣く輯録した安居院の書冊が神道集とも神道書とも名づけられてゐるに徴して端的に言ひうるころであり、更に同様の例をとれば、中世神道書中最も重要な五部書を始め、當時の神道書が多く某々本縁、某本源等の名を以て命せられてゐることをも擧げらるであらう。既にかの吉田兼俱の如きもかゝる縁起説を中核とする神道を特に本迹縁起神道と名づけてその特質を明確に握んでゐるのである。即ちその言ふところによれば所謂本迹縁起神道とは「某宮某社、化現降臨勸請以來、就縁起之由緒、構一社之祕傳、以口決之相承、稱累世之祠官、將亦修本地之法味、准内清淨之理教、捧祭祀之禮奠、備外清淨之儀式」といはるゝものであつた。

唯一神道
名法要集

併しながら右の如くたゞ縁起説のみを以て中世神道の全般をつくすものでないことはいふまでもない。兼俱の如きも亦右の本迹縁起神道と並べてなほ二つの神道のあることをいつてゐる。即ち一は兩部習合神道であり、他は彼自らの創唱にかゝる元本宗源神道であつた。兩部習合神道とは同じくその言ふところに従へば「以胎金兩界習内外二宮、以諸尊合諸神」もの、元本宗源神道とは「明陰陽不

測之元元、明一念來生之本本、明一氣未分之元神、歸萬法純一之元初」とする。そのいふところ抽象的に過ぎて稍、言語を斲んだ傾きがあるが、なほその意を汲んで嚮の本迹縁起神道に對する兩者の特質を考ふるならば、そは前者が常に夫々特定の神社に就て説を立つるに對し、後者は寧ろ一般的にわが神々に就て論をなさんとするもの、特に神代卷に對して或る解釋を與へんとするものなる點にその相異を認めることが出来るであらう。既に兼俱も兩部神道に就て「據神代之書籍設祕密之釋義」といつてゐる。兼俱自らの宗源神道と雖も亦窮極は同じ範疇を出でないものと思ふ。それ故にわれは正にその點にもとづいて中世神道の第二の特性を考へてみたい。

即ち兼俱によつて指摘された兩部習合神道の外、彼と同時若しくは彼の後に出でた諸神道なるものは實に近世に於ける復古國學の神道をも含めて要するに神代卷に對する解釋にその流派の基礎をおいてゐるものであつた。換言すればかくの如き神道説は一種の解釋學であつたというであらう。然るに解釋學なるものは最も廣義に於ける歴史學に外ならない。その意味はそれが現在の體験の基礎の上に過去を理解するものであり、その理解によつて逆に自己を認證するものなるをいふのである。かくの如き解釋學としての神道が吉田、垂加、鳥傳等の諸流派を得て復古國學就中本居宣長に於て最も純化されるに至つた經路は神道の歴史に於て特に興味あるところであるが、今私はたゞそれらの發展の中に一貫して存する歴史としての性格を指摘するにとゞめる。

なほまた中世神道としてはその實踐的方面、即ち行爲に對する規範を説く、ところの一面を無視することが出来ない。併しながら實踐上の規範といふも嚮にいふところの内清淨外清淨の教義の如き、またかの有名な三社託宣といへるものに於て代表せしめるところの正直、慈悲、清淨等の教説の如きに盡きるのであつて、所謂内外の清淨に就ては直ちに古代に於ける大禊の思想との關係が想起されるであらう。それはそれとして神道の一特性をなすものであらうが今はたゞ祭祀の要件たるをいふにとめておきたい。正直慈悲等を以て神道の中心とする思想は三社託宣の外、北島親房始め、廣く中世の神道家に通じて認められるところであるが、われ／＼はそれが單に神道のみの立場に於てよりも廣く當時の封建的共同社會内の道德として忠誠と恩顧を説くものと共通するところ多きを思ふのである。即ち忠誠と恩顧とが封建社會に於ける主従の合體を志向してゐる如く、正直と慈悲とはまた神を中心とする共同態の統一を志向するものであつた。かくて實踐上の規範を問題とする限り、われ／＼は翻つてその志向するところの中世の社會に考へ及ばねばならない。

五

「神者依人之敬増威 人者依神之德添運」とは貞永式目の第一條に見えるところ、神と人との關係を極めて簡潔に述べたものとして、上來説き來つたところも畢竟この數言の外に出でないのである。

中世の社會をいふとき人は直に封建制度の名を口にし、またそれが古代の氏族制度社會の復活であ

ることを思ふ。それは正しくその通りであるが、併しわれ／＼は果して封建制度の名に於て何を意味しまた何を以て古代社會の復活といふのであらうか。

思ふに封建制度社會とは要するにあらゆる存在がその根據を過去に有つところの社會であり、言ひかへればそれは歴史主義の時代である。試みにその社會の基礎であるところの莊園に見よ。それは本來開發の私領たることを本質とするものであり、一にその由緒がその領有の根據となつてゐるのである。また例へば武士の間に於ける主従關係の如きに就て見るも、その基礎は一に主家の血統と所謂重代の恩顧にあつたものなることと言ふまでもないところであらう。かくの如き社會に於てはその過去の由緒を語ることが、即ちその社會の存在理由を明かにすることであり、その存続の要件であつた。中世神道が正しくかくの如き性格を有すること上に明かにしたところである。而して普通に近世と呼ばれる徳川時代に於てもかくの如き社會の構造は一貫して變るところなく、従つてその神道の性格も亦根本的には中世のそれと相通するものであつた。獨り所謂復古神道のみはその志向に於て時代を越えたものがあり、その意味を全うしたのは却つて明治の時代に於てあつたと考へられる。然もそれに於て神道の歴史としての性格は一層明確に自覺されたものといひうるであらう。

以上神道の基本的性格として説くところ極めて概觀的であつて、僅にその一面を提示するのみ、所論の體また甚だ論證的でないが、神道理解への最初の着想としてその充實を今後の研究に俟ちたい。(昭和十二年一月三十日史學研究會例會講演草稿)